

新聞をめくりながら「福」の漢字を探す児童たち＝21日、勝山市荒土小



児童 新聞から「福」探し



勝山・荒土小 漢字成り立ち、字体学ぶ

白川文字学とNIE(教育に新聞を)をコラボ。勝山市荒土小で21日、新聞記事の中から漢字を探し、成り立ちや字体の違いを学ぶ授業が行われた。児童たちは新聞を入り口に漢字に対する興味を深めていた。

県教委の小中学力向上事業の一環で、立命館大白川静

記念東洋文字文化研究所(京都市)の久保裕之さん(53)を講師に招いた。3、4年合同の国語の授業で「漢字探検隊INニュースペーパー」と銘打って行った。

授業のテーマは「新聞から『福』の字を見つけよう」。

久保さんはまず、約2千年前の隷書や、約2300年前の篆書で書かれた「福」の文字を紹介。左の「しめすへん」は神様をまつるときに使う机で、右側の「畠」はお酒の入った器を示すことから「神様に酒樽を供え、お祈りして幸せを求めることを福」と言

うんだよ」と説明した。その後、児童28人は6班に分かれ、新聞をめくりながら「福」の文字を探した。福井新聞の1面の題字に使われている古い字体の「福」や、広告に登場する丸文字の「幸福」など、たくさん「福」を見つけた。字体ごとにグループ分けしていった。

この日は、1、2年生対象に、校舎内を巡って古代文字のもとになったものを探すが、ゲームも行った。児童たちは、音楽の「楽」のもとになった「鈴」を見つけると、歓声を上げていた。久保さんは「習っていない漢字でも拒否反応を示さず、意欲的に取り組む姿から、福井における白川文字学の広がりを実感した。低学年では新聞をじっくり読んでいない子も多いだろうが、活字や字体の違いから漢字、新聞に興味を持ってもらえれば」と話していた。

「これから新聞を作ったり、読んだりするとき、内容だけでなく、字体にも関心を持ってください」と呼びかけた。

(宇野和宏)